

平郡島の雄々しい歴史

1 東西に長い平郡島の地形

平郡島は、東西に細長い地形をした島です。交通が便利になった現在では東浦と西浦が緊密に連携し合っていますが、古い時代にあつては遠く離れていたために東西の交流が少なく、生活習慣などに違いが見られました。

さて東西に長くて平地が少ない平郡島の地形は、なぜに生まれたのでしょうか。日本列島西部の地形は、フィリピン海プレートが南から押したために生じた皺の地形ですから、東西に長く伸びています。平郡島も例外ではなく、東西に長くて山がちな地形になったのです。

なお東には五十谷海岸のように砂浜が見られますが、西には砂がなくて岩石海岸です。そのような違いはなぜに生まれたのでしょうか。平郡島の東側は、地中深くに存在した花崗岩がゆっくりとせり上がって形成されました。花崗岩が風化すると砂粒や真砂土に分解するので、砂浜ができたのです。一方で平郡西では火山が爆発しました。火口からは溶岩や火山灰が噴出しました。溶岩が冷えると凝灰角礫岩ぎょうかいかくれきがんになって、一面に散乱したのです。なお島の南側の長崎鼻では、植物を挟み込んだ跡がついた化石が採取されます。火山灰が植物に降り積もって、長い年月の間に化石になったからです。

2 最初に平郡島に住みついた人々

今から数万年前の地球は寒冷期にあたり、巨大な氷が極地を広く覆って、瀬戸内海には海水がありませんでした。したがって当時の平郡は島ではなく、山並みだったのです。平郡周囲の草原ではナウマンゾウやオオツノジカなどが闊歩していました。それらの巨大獣を追って原始人が、大陸からやって来ました。原始人は一か所に定住することなく、獲物を獲得しながらの移動生活をしていました。巨大獣の皮で作ったテントを家にしました。平郡の山裾でもテントを張ったことでしょう。現在でも平郡島の周辺で、海底に散乱しているナウマンゾウの牙や臼歯などの化石が漁網にかかることがあります、当時の様子を垣間見ることができます。

今から約1万年前に地球が温かくなって、瀬戸内海に海水が入り込んでくると、平郡は島になります。温暖化に伴って小動物が多くなり、木の実が増えて、食料が豊富になったことから定住が可能になりました。平郡島のあちこちで、縄文土器や弥生土器の破片が出土しますから、島になった当初から人間が住み続けていたことが判ります。

3 「平郡」の名の由来

平安時代の終末期に武士の力が伸張した結果、日本各地で合戦が起こります。元暦元（1184）年の宇治川の戦いにおいて、源（木曾）義仲の軍が敗れた際に、義仲の遺児である平栗丸（平群丸）が大和の吉野に逃げ延びます。さらに危険が迫ったために、

従臣の鈴木三郎仲光らに守られて瀬戸内海を西行し、平郡島の東浦へ辿り着いて身を隠したとの逸話があります。そのことによってこの島に平群の名が付き、後に平群の表記になったと言われていました。

なお平繰（へくり）中将友安が滞在したことによって、平群の名がついたたとの伝承もあります。さらには古文書に「倍具里（へぐり）」や「遍ぐり（へぐり）」との記載もあって、由来については諸説があります。

東浦に住みついた鈴木三郎仲光は、武運を祈って早田八幡宮を創建しました。仲光が死去すると、子の義重が菩提を弔うために円福寺を建立しました。やがて東浦を見下ろす高台に、平祢川城砦と城の平山城砦を築きました。

さて東浦の浄光寺には、鎌倉時代に作造された木造薬師如来坐像が安置されています。肉付きのよい流麗な作風は平安時代の藤原仏の特徴を忠実に受け継いでおり、県の有形文化財に指定されています。鈴木家や浄光寺に残る文書によれば、「文治元（1185）年に伊予国（現愛媛県）から薬師坊主を迎えた」との記述があり、それに関連しての坐像とされています。薬師如来像の存在によって、鎌倉時代には高い文化が流入しており、平郡島に根付いていた証拠であると言えます。



木造薬師如来坐像

4 河野水軍の平郡島への移住

鎌倉時代後半の文永11（1247）年になると、元（中国）が大艦隊でもって日本に攻めてきました。もしも元軍が北部九州を突破し、上関海峡を通過して都に攻め上ろうとすれば、平郡島あたりで元軍の進行を阻止しなければなりません。平郡島に砦を築いて、船団を駐屯させることになりました。

当時は河野水軍が鎌倉幕府に従って瀬戸内海を支配していましたから、幕府は防備を河野氏に命じました。河野氏本家は北九州の防備に向かいましたから、平郡島での防備を一族である浅海氏に指示しました。浅海能信は現在の愛媛県北条市浅海から平郡島の西浦に軍団を移動して砦を築き、平郡島を防禦の要にしました。また別の古文書には、弘安2（1279）に河野丹治が百姓を引き連れて平郡島に来たとの記載もあります。砦は、旧平郡西中学校の南東側にあたる平見山に築かれました。西方からの進軍をいち早く発見できる場所です。幸いに元軍が瀬戸内海に侵入することはありませんでしたが、浅海能信や河野丹治たちは、そのまま平郡島に住みつきました。能信は髪を落として出家して浄空沙弥と称し、弘安3（1280）年に重道八幡宮を造営し、大般若経600巻を奉納しています。併せて海蔵院も建立しました。

5 厳島の戦における毛利軍への支援

戦国時代の防長（現山口県）は有力大名の大内氏が領していましたから、平郡島も

大内氏の支配下にありました。ところが重臣である陶隆房（晴賢）が、大内義隆を自害に追い込み、陶氏が防長を領することになります。天文23（1554）年、陶氏の本隊が富田城を発して津和野に攻め込んだ際に、毛利氏配下の小早川軍が海上から富田城に攻撃をしかけてきたので、平郡西浦の浅海通高たちが駆けつけて富田城を守りました。富田城での戦いは、毛利氏と陶氏の存亡をかけた大合戦の前触れでした。

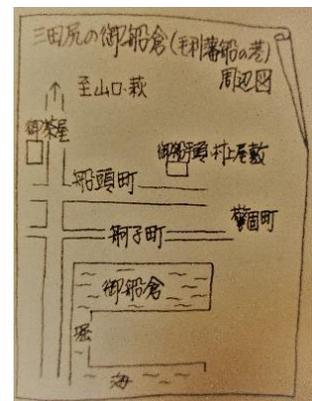
大合戦とは、弘治元（1555）年の厳島合戦です。毛利方と陶氏方の双方が全軍を投入しての衝突になりました。弱小の毛利方が強大な陶軍を厳島に誘い込み、奇襲をかけて全滅させる策をとったのです。夜明け前に奇襲をかけるには、敵に気づかれぬように闇に紛れて、毛利軍を本土の地御前から厳島の包ヶ浦へ渡海させなければなりません。能島水軍を味方につけましたが、渡海のための船が足りません。毛利方は方々の浦々に船を出すように催促しました。勝敗の見通しが立たないために、多くの浦が出船を躊躇しましたが、平郡島は可能な限り多くの船を出しました。台風来襲の影響もあって渡海に難渋しましたが、首尾よく毛利軍を送り届けました。その結果、奇襲は大成功を収め、陶の全軍を壊滅させました。弱小の毛利軍が強大な陶軍に勝利したことから、後に歴史家から「西における桶狭間の戦い」と称されました。毛利氏が西の雄になる際に、平郡島の人々が大きな手助けをしたのです。

6 平郡島の武士たち（平郡舩子）

西国で最大勢力になった毛利氏は、厳島合戦で多大な貢献をした島民に恩を感じていました。戦国時代が終わって長州藩を治めることになった毛利氏は、厳島合戦に功績のあった平郡島の人々を武士身分にして、年貢米を納めなくてよいことにしました。平郡島には稲田がほとんどないため、喜ばしい判断でした。舩子となったのは島民全員ではなく、厳島渡海に馳せ参じた100人としました。与えられた任務は、毛利水軍の船での水夫仕事です。船内の掃除をしたり、帆の上げ下げをしたり、船綱の脱着をしたりしました。江戸時代は平和な時代ですから、軍船での任務はほとんどなく、参勤交代で使われる御座船や朝鮮通信使を護衛する先導船の維持管理や運航に携わりました。

長州藩の御船蔵は、萩と三田尻（防府）にありました。したがって平郡舩子となった者は三田尻に住んで、任務を遂行しました。ちなみに三田尻の御船蔵の北側の通りが、舩子町と称されました。平郡島からの人たちが住んでいた場所です。

武士身分の平郡舩子は、交替制でした。藩は人選を島内に任せており、100人を交替で三田尻に出しました。なお繁忙の際には125人の時もありました。舩子の当番になった年には三田尻に出かけ、そうでない年には平郡島に戻って農業に勤しみました。武士になったり農民になったりと、他に類例のない特殊な身分制度が、平郡島にはあったのです。



三田尻の舩子町

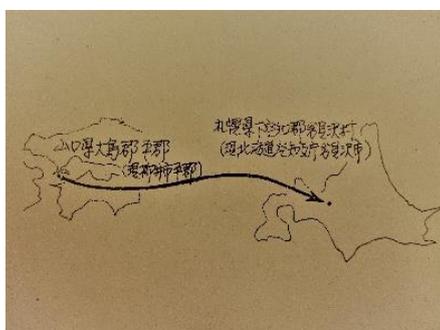
江戸時代の平郡島は大島宰判に属し、久賀の代官が管轄しました。庄屋は鈴木家が世襲で勤め、4人の畔頭くろがしらが補佐をしました。文政8年(1825)からは農民の意見を取り入れて、庄屋を鈴木家以外の家に任命することもありました。

7 北海道への士族移民

東浦の早田八幡宮や西浦の重道八幡宮に参拝すると、北海道の人々が奉獻した狛犬が、参拝者を迎えてくれます。狛犬の台座には「北海道岩見沢 明治十七年開始ヨリ 同廿四年マデ移住者」と刻んであります。平郡島から北海道岩見沢と滝川に多くの者が移住し、立派に開墾を成し遂げ成功した証として出身地の神社に狛犬を贈ったのです。



北海道から奉獻された狛犬



北海道へ移民することになった経緯を見てみましょう。明治維新によって武士は、士族との肩書をつけられましたが、俸禄(給与)がなく多くの士族が貧困に陥ったために、新政府への不満が高まりました。そこで新政府は、困窮士族の生計を成り立たせるために、補助金を出して北海道への士族移民を実施したのです。制度開始の明治18

年に平郡島から岩見沢への移民は23戸でした。

江戸時代の平郡島には刀を差した武士はいませんでした。交替で廻子となり武士格となる者がいました。そこで維新後に100人が士族に認定され、移民資格が与えられたのです。ちょうど食料不足で困窮状態にあり、幸いしました。明治16年の干害と明治17年の風水害は甚大で、新聞は「困難をきわめ、日々の食餌に、糠あるいは蕎麦、麦粕、豆腐粕等に柿の葉、ピンピン草を混和して常食となし、このままでは餓死する者も出るらん」と窮状を報じました。士族移住の政策は、「渡りに舟」でした。食料にありつくと、希望に胸膨らませて北海道に渡りました。小樽からはSL弁慶号が引っ張る石炭運搬用の貨車に乗って、小雨の中を石炭粉で真っ黒になりながら岩見沢駅に着きました。あてがわれた土地に入植したのですが、自然条件の過酷さは想像をはるかに超えていました。かつて人間が入ったことのない原野には、大木が立ち並んでいました。



入植の際の弁慶号

斧で巨木を倒しましたが、どっかと居座った根を人手で掘り出すのですから、とてつもない苦労を要しました。来る日も来る日もつらい作業は続きました。冬になり朝起きてみると、布団の周りには雪が降り込んで積もっていました。暖かい夏は快適だろうと期待していたら、やぶ蚊が血を吸い、ブヨが噛みついてきます。夏にはマラリヤ、

秋には腸チフスが蔓延して、入植者を悩ませました。

萩や鳥取などの城下町で竹刀を振り回し儒教を口ずさんでいた連中には、辛抱できずに本土へ帰っていく者もいました。一方で平郡出身者は、着々と原野を耕作地に変えていきました。それもそのはず、島の傾斜地を農地にした人々ですから当然です。官報によれば「萩など城下町からの入植者は、身体軟弱にして労働に堪えず。監督者が責めれば、土地の卑湿を愁い、樹木の密林を歎くなど、種々の苦情を唱うる」と酷評しています。一方で「平郡からの入植者は、着実な志をもって開墾を果たしている。余裕を生んだれども質素儉約を守り、なおも増産に勤めている」と記載して褒め讃えています。日本全国から集まった入植者の中で、平郡島出身者だけが抜群の成果をあげ、底力を見せつけたのです。

また同時期に北米やハワイなどへも、平郡島から188人が移民しています。様々な困難を克服し、故郷に送金をしながら、現地での生活に馴染んでいきました。

8 柳井市への編入

平郡島は長らく周防大島との関係を密にしてきましたが、昭和29年に90%の島民が柳井市への合併を希望したことから、柳井市への編入が実現します。海底ケーブルによる島への送電が開始されたり、連絡船が大型化するなど、諸施設の拡充が次々に実施されて、生活環境が改善されました。

昭和20年の平郡島には3,848人もの島民が居住しており、大いに活気を呈していました。やがて若者たちが高学歴をめざし、都市部で就職する傾向が強まると、人口が漸減していき、現在では数百人になりました。

住民数は減ったけれども、過疎化を打破して活気ある平郡にしようと、様々な取り組みが企画され実施されつつあります。今まさに明るい展望を胸に、多大な努力がなされているのです。

柳井市教育委員会 松島 幸夫